

# ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp

獣  
医  
の

カ  
ル  
テ



36



アイビー動物病院長  
(射水市戸破)  
宮川 慎

少し前のことになりましたが、子猫を拾って飼い始める方が増えた時期がありました。春に生まれた野良の子猫が成長して活発になり、人目につくようになったからと思われず。可愛い顔の子猫に心を奪われ、思わず連れて帰ってしまったというケースもあるでしょう。家族の一員として迎え入れるに当たって、注意していただきたいことがあります。

外で主に生活する動物たちは、ノミやダニに寄生されることがよくあります。これらは皮膚など体表面に寄生するので「外部寄生虫」と呼ばれ、動物だけではなく人も

## 子猫を拾ったときは



当院に持ち込まれた野猫の子猫

刺して皮膚炎などの症状を引き起こします。また外部寄生虫は人に感染するウィルスや内部寄生虫を媒介して、重篤な病気を発症させることもあります。最近特に目に付くのは、重症熱性血小板減少症候群や日本紅斑熱です。山菜取りに山に出かけてダニにかまれて、死亡した事例もあります。ノミ・ダニの予防はしっかりしておいて

## 寄生虫・ストレスに注意

ください。

また消化管内など体内に寄生する「内部寄生虫」も注意が必要です。一般的に線虫、条虫などが寄生して栄養を吸収します。親猫が感染していた場合、胎盤や授乳を通して感染することがあります。カエルを食べていた子や、寄生しているノミが毛繕いするとき口に

入った子猫は、それらが媒介する目やにが時には重症化して命の危険を及ぼします。人に伝染しませんが、他に同居猫がいる場合は感染するリスクを伴います。拾った子猫をすぐに家の中を自由にさせることはせずに、箱やケージなどある程度限られたところで1〜2週間慣れるのを待ち、新たな病気を発症しないのを確認してから開放しましょう。

寄生虫に感染することもあります。多くは検便などで検出できませんが、予防的に虫下しを投与しておくのも良いでしょう。

新しい環境では動物もストレスを感じます。ストレスを受けると病原体と闘う免疫機能が落ち、潜伏しているウィルスや細菌たちが猛威を振るって感染症を発症することがあります。鼻汁やくしゃみ、

子猫を拾ったら、まず動物病院で健康チェックを受けてください。感染症がないか確認し、飼育に関して適切な指導を受けてください。自宅で飼えないときは、里親を募集するのも方法です。県動物管理センターは毎週木曜日に譲渡会を開いています。同センターや県獣医師会のホームページを参考にしてください。